

## パスカルと危機管理の言葉

藤 江 泰 男\*

Pascal et le problème de la persuasion « dans la situation critique »

Yasuo FUJIE

### はじめに

今回の論考のタイトルは、幾分折り合いの悪い二つの単語を組み合わせた形になっているが、これには理由がないわけではない。最近のニュース、福島原発の被災と爆発に絡む説明責任の問題、もうひとつは、最近読んだ書物で繰り返し展開されていた、「論理」と「レトリック」の対比・対立の問題、である。

前者については、解説の必要はなかろうが、筆者はたまたま、今回の事故を一ヶ月の在仏中、現地のニュースで見続けることになり、その加熱した報道ぶりと対比して、日本政府の対応、NHKでの報道・解説、さらには原発当事者たちの説明の仕方などパソコンを介して見るにつけ、考え込むことしきりであった。特に「原子力安全・保安院」からの説明を担当されたN氏の語り口は、かの地で聞いていると何とも納まりが悪く、その「説得力のなさ」というか「都合の良さ」には、ときに首を傾げたものである。

後者の問題の方は、林達夫氏と久野収氏の対談をおさめた『思想のドラマトゥルギー』のことである。その中で、林氏は、西洋の思想の歴史を大きく、論理とレトリックの対抗関係という括りで提示し、理性の論理性に対し、想像力のレトリックの重要性を強調されている。ギリシアの昔からの、プラトンのディアローグの意味、対話し説得する技術の重要性に熱弁をふるっている。それはまた哲学的理性と文学的想像力との対比のようにも映り、デカルトの理性にパスカルの「繊細の精神」を、ないしは「幾何学的精神」と「繊細の精神」とを対比するパスカル的なレトリックを対置しつつ、「説得」の重要性を語っている<sup>1)</sup>。

以上が、本稿執筆の直接的きっかけをなしたところであるが、それに付随するその他の資料や文献については本論の中で紹介しよう。本稿はあくまで、パスカルのテキストに関する研究であり、その解釈の問題が、以上の事件や文献と微妙に絡み合っている、という

1) 林達夫＋久野収『思想のドラマトゥルギー』（平凡社、1993年）p. 422. レトリックの訳語についても「説得術」が最適だと語っている。同書、p. 425.

\* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

ことを、あらかじめお断りしているに過ぎない。

問題点はただひとつ、論理とレトリックの対比・対立の発想をどう捉えるか、ということである。これはパスカル解釈そのものでもあり、特に「幾何学的精神」について論じた小品、ないし『パンセ』の幾つかの断章の主題そのものである<sup>2)</sup>。パスカルは果たして、「幾何学的精神」と「繊細の精神」とを対立的に提示したのだろうか？ それは、理性に基づく精神と想像力に基づく精神との、ロジック的な精神とレトリック的な精神との「対立」だったのだろうか？ それはまた、論証と説得との対立ということなのだろうか？ 以上が本稿の主題である。この問題を、パスカル後期の小品、「幾何学的精神について」を中心に、詳しく検討してみたいと思う。

## 1. 「幾何学的精神」あるいは「説得術」の問題点

「まえがき」で述べたロジックとレトリックの対比の問題については、パスカルのテクストとして、まず「幾何学的精神について」という小品があり、さらにより対比的、対立的な表現が目立つ『パンセ』の断章がある。前者の第2章（あるいは第二部）は「説得術」という表題をもち、幾何学的論証とそれと対比する説得の論理ないし説得のレトリックが対比的に論じられている、というような印象を受ける箇所が確かに認められる。さらに『パンセ』の断章では、明示的に「幾何学的精神」と「繊細の精神」とが対比的に提示され、タイトルとしても用いられているので、小品以上に二項対立的な印象が強い。また、パスカル研究者・前田陽一氏の解説でも、この対立を「文科と理科」との対立、つまり文系精神と理系精神との対立として語られており<sup>3)</sup>、どうしても、この間のテクストを「対立」の基本線で理解してしまいがちである。

パスカル研究者ならざる筆者もまた、まずはこの線で、『パンセ』の当該断章群を読み、頭を抱えることになった。というのも、そこでは幾何学的精神について、ある時は「原理が多い」と語られ、ある時は「原理が少ない」と語られており、その統一的理解を得ることがなかなか困難であった、からである。もちろん、物理学的精神と数学的・幾何学的精神との対立として理解すべき、という類いの指南がないわけではないが、それですっきり、とは必ずしもいかない。原理の多さで同じく特徴づけられている「繊細の精神」と、どう折り合いをつけるのか、一筋縄ではいかない問題なのである。

さて、この問題について、別の解釈がすでに成立しているのではないかと筆者が思い始めたきっかけは、パスカル概説というか、ある哲学事典<sup>4)</sup>のなかの解説的文章を、たまたま読んだことにある。そこには、概ね次のように記述されていた。論証による「納得させる術」とレトリックによる「説得する術」とを区別したこと、さらに、この「説得術」

2) パスカル（「幾何学的精神について」）からの引用は、原典については、いわゆる「メナール版」、*Pascal Œuvres complètes, Œuvres diverses (1654-1657) III* (Desclée de Brouwer, 1991) を、翻訳も、メナール版の邦訳、『パスカル全集 第一巻 生涯の軌跡 I (1623-1655)』（白水社、1993年）を使用する。以下、本テクストの引用は、他のパスカルの著作と区別するため、OCIII と略記し、その後に頁やパラグラフ番号などを示すことにする。

3) 前田陽一「パスカルの人と思想」〔『世界の名著29 パスカル』（中央公論社、1978年）所載〕p. 37.

4) J. Russ, *Dictionnaire de Philosophie*, Bordas, 1991, p. 362.

は、その「納得させる術」(論証)と「気に入られる術」(対人理解と表現力)とを併せ持つ(技)術である、と<sup>5)</sup>。

つまり、ここでは、納得させる術——これが狭い意味での幾何学的精神に当たるであろう——と説得術との対立は、同じレベルでの対立ではなく、説得術は、さらに広い射程をもつ精神、すなわち、納得させる術・論証の技術に加えて、対話の相手に気に入られる術をもわきまえているような精神、を体現したものであり、さらに上位の精神であることを述べている。納得させる精神ないし論証的精神の直接対立物は、説得術ではなく、気に入られる術の方なのである。レトリックというものが、本来そうした対話者の心理状態をもわきまえた、説得に長けた精神であれば、片方だけの精神で対応(説明)できるものではない<sup>6)</sup>。

そこでまず、「幾何学的精神について」と題して、フラマリオン社から出版されている、アンドレ・クレール氏編纂になる著作の序文から、その解釈を見てみよう<sup>7)</sup>。氏によれば、上記の区別は、より明快に整理されている。つまり、説得の技術(*art de persuader*, 以下、「説得術」とする)は、納得させる技術(*art de convaincre*)と「気に入られる技術(*art d'agréer/plaire*)」, 両方の技術を含むものである<sup>8)</sup>、と語っている。このように二重の技術を擁するものとして説得の技術があるのであり、単に論理的な技術、つまり論理的に納得させる技術にのみ、もともととどまるものではない。話し相手、討論の相手の思いを了解しつつ、最も有効な表現手段を選択し実践するためには、論理性を踏まえた「気に入られる術」もまた必要であるのは、けだし当然である、との解釈である。パスカルの説得の技術の位置づけは、そうした二重の構成を意図したものであり、単に論理性の一面にのみ関する技術ではない。納得させる技術と異なる所以である。さらに、それは気に入られる技術とも異なる、あるいはそれと合致しない。それを含みつつさらに拡がり・深みをもつ技術だからである。幾何学的精神の理解に関して、「納得させる術」としてのみ理解され、それに「説得の論理」を対比するのは正しくない、あるいは「気に入られる術」を対比させるのは正しくない、ということになる。階層の違いとかレベルの違いを考慮すべきである。狭い意味での幾何学的精神と、さらに広い意味での幾何学的精神とを区別すべし<sup>9)</sup>、と言うべきであろうか。

説得が論理性の明確さだけでは足りず、対話する相手の精神の有り様に応じた柔軟な反

5) 正確にはこう表現している。「かくして彼は、〈納得させる術〉(*l'art de convaincre*)、すなわち、理性的な証拠に支えられて精神の同意を勝ち得る技術と、〈説得術〉(*celui de persuader*)とを、つまり、〈納得させる術〉であるとともに〈気に入られる術〉(*celui d'agréer*)でもある〈説得術〉とを区別した」(*Ibid.*, p. 362)と。

6) もっとも、このRussは、幾何学的精神と繊細の精神、いずれをも含む「きわめて精妙な *subtile*」精神として、パスカルの「レトリックと論法」を語るのみである。問題は、幾何学的精神そのものの二重性の方にある。われわれとしては、その二重性ないし両義性の側面から、両者の統一を考えてゆきたい。

7) A. Clair 氏の編纂になる、*De l'esprit géométrique*, GF-Flammarion, 1985. テキスト自体の問題、その執筆年代や構成、最終的仕上げの有無などは、次章の課題とし、ここでは当面の問題のみを取り扱うことにする。

8) *Ibid.*, p. 14. 「説得術は、納得させる技術と気に入られる技術という二重の仕方で構成されている」と、端的・明確に定義している。これはまた、パスカル自身の表現でもある。Cf. *OCIII*, II-9, p. 416.

9) 第一部・パラグラフ21に関するメナール氏の注参照。

応を必要とする、ということには、誰にも異存はなかろうと思う。レトリックとは、そうした努力の総体に関する技術であろうと思われるが、問題は、それを幾何学的精神の内部で語りうるか、ということである。納得させること、気に入られること、二つの技術の違いについては当然のところであり、それを総合する説得術に関して、パスカルがいかん語っているかが、本テキスト解釈の中心問題である。が、その第二部で、パスカルは、後者の技術（気に入られる技術）についてまったく自信がないこと、このテキストでは、前者の側面のみ提示し、後者の技術については論及しない旨、これも明確に述べている<sup>10)</sup>。「私がこちらの方を論じないのは、私にその能力がないからである<sup>11)</sup>」と。

## 2. テキストの成立と構成について

さて、問題のテキスト「幾何学的精神について」の内容について、少し述べておこう。その内容こそが、これまで言及してきた問題の発生源であり、問題の核心であるのだから。それはまた、『パンセ』の中の有名な断章<sup>12)</sup>、「幾何学の精神と繊細の精神について」と題された断章との連続、あるいは断絶を語るテキストでもある。そこで、その内容について筆者なりの分析を述べる前に、当テキストの成立年代について、幾分かを説明しておくべきであろう。というのも、その内容の違い、展開の仕方の違いが、『パンセ』との時間的隔たりを証すものであり、それがまた、当テキストの存在意義を語ることになるのであるから。

### 2.1.

さて、この執筆年代については、メナール氏の検証結果を紹介することで、責任を果たさせて頂こう<sup>13)</sup>。その道の専門家でもない筆者が、勝手に介入できる問題ではないからである。が、もちろん、その年代の特定が内容の評価に関る以上、無視してよい問題でもない。メナール氏の推定では、1655年頃、ということになる。ブランシュヴィックは58-59年を想定していたとのこと<sup>14)</sup>、さらにそれが一時はひろく受け入れられていたようであるが、様々な検証をへて、またメナール氏の徹底した検証により、二つの部分で構成されたこの小品を、ともに55年あたり、と推定している。アンリ・グイエのように、前半部分（「幾何学一般についての考察」）に比して後半部分（「説得術について」）を幾分後の時期に推定する立場もあるとか、しかし、メナール氏の最終的判定は、上記の通りであり、同時期ないしは並行的に執筆されたもの（une certaine simultanéité de rédaction）<sup>15)</sup>、と見なし

10) これは、クレール氏編纂の版、p. 14からの説明。その当該箇所は、p. 88にある。

11) 第二部・パラグラフ11から、*OCIII*, pp. 416-417; p. 416（この頁数は、メナール版とその邦訳〔；以下〕、からのもの。以下、特に指定がなければ、テキスト「幾何学的精神について」は、この版からの引用である。詳しくは、次章の本文および脚注を参照のこと）。

12) B. 1/L. 512. この断章とその周辺の断章のこと（ちなみに、B. はブランシュヴィック版、L. はラフュマ版、S. はセリエ版、K. はカプラン版の略号として使用する。いずれも、パンセの編纂に関する著名は校訂者の名前である。詳しくは次章・第3章の脚注を参照のこと）。

13) メナール版から、*OCIII*, p. 368; p. 436参照。

14) *Ibid.*

15) *Ibid.*, p. 370; p. 437. この評価が記される直前に、メナール氏は、「二つの断章のパースペクティブの違いが異なる時期の執筆だと推測する理由にはならない」（*Ibid.*）とも語っている。

ている。

したがって、この小品の執筆は、56-57年にわたり執筆され公表された『プロヴァンシアル』成立の直前にあたり<sup>16)</sup>、また、57-58年にその多くの草稿が書かれたものと推定される『パンセ』の執筆に、明らかに先行する時点、ということになる。

## 2.2.

続いて、われわれの問題に関係する限りで、テキスト内容について、簡単にまとめておこう。「幾何学一般に関する考察」と銘打たれた前半の断片、「説得術について」と銘打たれた後半の断片、という二つのテキスト部分によって構成されているこの「幾何学的精神について」という小品は、メナール版ではあらたに、前半が40のパラグラフに、後半が30のパラグラフに整理され、それぞれ通し番号付きで表記されている。論旨の展開が、あるいは、そのこだわりがよく分かるように編集されている。

### 2.2.1. 第一部・序論 (1-4)

さて、その第一部（前半のテキスト）の方だが、まず、本作品の基本内容について告げる序文的な文章から始まっている<sup>17)</sup>。つまり、真理の探究に関して、1) その発見、2) その論証、3) その識別、という三つの課題に分けた後、自身の課題を、第2の「真理を論証すること」と限定し、さらにこの第2の課題は、第3の課題をも含んだものになる、と展開している。真理を論証できれば、真偽の識別は同時に可能である、というのがその論拠である<sup>18)</sup>。

第1の課題を避けるのは、その方面の業績についてはすでに多数存在するから、と軽く弁明しているが、これはデカルトの『方法序説』がすでに出版されていることを暗示するものではないか、とメナール氏は自身の注で解説している<sup>19)</sup>。

こうした課題を二つの項目に分けて果たすことを、第2パラグラフにおいて宣言する。第1に、幾何学的論証の導き方の規則を、第2に、幾何学的順序の規則を、含むことになるパスカルは予告している。この部分は幾分抽象的な記述でわかりにくい箇所でもあるが、その主旨については明快であるように思う。つまり、最初の部分、第一部においては、幾何学的な「論証の仕方」のエッセンスについて語ること、第二部では、そうした論証の「順序 (ordre) の考え方」、幾何学的な論証の展開の「順序の考え方」について、それぞれ展開することになる、という主旨である。後者の課題は、証明した「命題の配列の順序<sup>20)</sup>」とも語られている。あえて簡略化してまとめるとすれば、「幾何学的な証明とは何か」を語る前半（第一部）、その証明された「命題の配列の仕方 (順序)」について語る後半（第二部）、ということになろうか。

16) *Ibid.*, p. 375.

17) 以下、本テキスト（「幾何学的精神について」）からの引用については、メナール氏の配慮を活用して、ローマ数字と算用数字を組み合わせ、簡略に記入することにする。例えば、II-15とあれば、「後半あるいは第二部のテキストのパラグラフ15」からの引用、ということである。必要に応じて、もちろん頁数を示すこともある。

18) *OCIII*, I-1.

19) *Ibid.*, p. 390, n. 2.

20) *Ibid.*, I-2. このパラグラフは、最終的には削除されたもののようである。Cf. *Ibid.*, p. 392, n. 1.



### 2.2.2. 第一部・第一段 (5-9)

そこで、第5パラグラフから始まる第一部の本論では、幾何学的な論証では何が可能で、何が可能でないかを軸に展開されることになる。つまり、幾何学的な論証とは何であるか、の部分である。そのために、まず完全な秩序における論証と幾何学的な論証（完全ならざる論証）との基本的な違いが説明されることになる。それはつまり、人間を超えた論証と人間に可能な論証との違い<sup>21)</sup>、ということである。

パスカルがここで「完全な秩序」の名の下にイメージしている方法は、「あらゆる術語を定義し、あらゆる命題を証明する」というような論証方法である。しかしこれは、神ならぬ人間に可能な証明方法ではない。すべての言葉が定義できるわけでも、すべての命題が証明できるわけでもない、からである。もはや定義不可能な「根源的な言葉 (mots primitifs)」<sup>22)</sup>、証明しようもない「明白すぎる命題 (原理ないし公理)」というものが存在するからである<sup>22)</sup>。さらに言えば、そうした言葉は、定義することで返って不明となり、そうした命題は、明らかすぎて、それ以外の命題の証明のためにむしろ活用されるような明白すぎる命題、つまり証明のための原理であり公理であるので、証明自体が不要なのである。

であれば、このすべてを定義できるわけではなく、すべてを証明できるわけでもない、完全な秩序ならざる幾何学的な秩序、幾何学的な論証体系は、それ故に、確実性を欠くわけでも、それだけ確実性が劣るわけでもないのである。欠けている部分は、あまりに明快、あまりに当然であることからくる欠如であり、欠陥ではない、とパスカルは語ることになる。ある種のものが存在しない、という欠如は、あるべきものが存在しないという欠陥とは異なる、と言えよいのだろうか。デカルト的表現によって、このあたりのパスカルの意図をパラフレーズすれば、その通りである<sup>23)</sup>。

もちろん、両者の安易な融合もまた慎むべきであろう。ここで、定義の及ばないところ、論証の及ばない命題をカバーするもの、それを支えるものが自然ないし自然の光と称されている。理性の別名としての自然の光、というデカルト的な定義というよりは、そうした理性を下から支えるもの、そのはたらきを可能にする基盤なり出発点として自然（の光）が呼び求められている。名称は確かにメナール氏も言うようにデカルト的ではあるが、その適用範囲は、必ずしもそうとは言えないように思われる<sup>24)</sup>。

### 2.2.3. 第一部・第二段 (10-22)

このようにして、完全なる秩序と対比しつつ幾何学的秩序を性格づけた後、第一部の本論は第二段階へと展開する。第10パラグラフ以降を、そう位置づけてもよいであろう。つまり、人間的に最も完全な体系としての幾何学的秩序を、さらに性格づけるのに、中間性の着想を導入する。というのも、なるほど完全な秩序ではないにしろ、幾何学的秩序は、かといって不完全な秩序ではないからである。むしろ、完全と不完全との中間にある

21) *Ibid.*, I-5.

22) *Ibid.*, I-9.

23) このテキストではデカルトとの共通部分が浮き彫りにされる、という印象がある。この箇所はもちろん、冒頭部分では、自身の課題の限定に際してデカルトの著作が前提にされており、さらに第二部では、デカルトに明示的に言及して、コギトの独創性を擁護している。Cf. *Ibid.*, II-23-25.

24) Cf., *Ibid.*, p. 395, n. 2.

秩序ないし体系として特徴づけられる。この中間的なあり方、それが幾何学的秩序の本質規定であり、それはまた、人間そのものの本質規定でもある。しかし、後者の指摘（人間そのものの本質規定）については、このテキストでは認められない、そうした視点の不在こそが、このテキストと『パンセ』とを隔てるものである、とメナール氏は指摘している。それは、それぞれの執筆年代の特定にも絡む、メナール氏の貴重な指摘でもある<sup>25)</sup>。

さて、この本論の前半から中盤の展開の中で、注意しておくべきこととして、そしてパスカルの哲学の中でおそらく銘記すべきものとして、彼の主張する「名目的定義」について、ここで指摘しておくべきであろう。定義の何たるか、何をもって論証を始めるべきかについて、共通の理解を欠くこと、ある種の先入見にとらわれていることに、論争の種が、永遠の紛争の原因がある、と繰り返し説くことになる。幾何学的論証において、問題になるのは、「事物の定義」あるいは「ものの定義」という類いの定義ではない、とパスカルは、しつこいほどに繰り返している。定義とは、そのタームの指示するものが了解されているか否かが問題なのであって、当の対象が定義によって表現されているかどうかではない、と自説の「名目的定義<sup>26)</sup>」について語っている。それに対し「事物の定義」は、本来、論証の後、考察の後に来るものであり、論証のために前提とすべき言葉の定義の段階では、その言葉で何が意味されているか、何が指示されているかがわかる、ということで、定義としての役割は十分に果たされている、とパスカルは考える。幾何学的定義とはそうしたものであり、従って、ある種のタームについては、つまりある種のものの指示にとっては、定義自体が不要である、定義すればかえって曖昧になったり不明になったりするような場合がある、と力説している。そうした定義不要の言葉、定義すべきではない言葉こそ、先に触れた「根源的な言葉」のことである。それは、それ自体で何を指示しているか明らかであり、それ以上に定義する言葉を必要としない。命題レベルにしても同じことで、証明する必要もないほどに明白な真理、幾何学的に言えば、公理や公準として論証のための出発点、原理となるような命題が、また存在するのである。根源的な言葉、根源的な命題つまり公理・公準、そうしたものは、それ自体で明白で、そこから始めるべき術語、それを出発的にすべき命題なのであって、定義も論証も必要としない。

そうした定義不要の言葉として、パスカルは空間、時間、運動、等しきなどを挙げている<sup>27)</sup>。時間の定義については、その内容において重要な展開ではあるが、今回の本稿のテーマではないので言及しない。ある対象を指示することと、ある対象についてその特性を表現することとの決定的違いをくれぐれも理解するようにと、繰り返しパスカルは語るのである。この取り違えが、ほとんどの論争の原因である<sup>28)</sup>、ということである。

この点を混同することがなければ、あとは幾何学的な定義と論証、それらの前提ないし基盤となる自然的な明証性、つまり「自然の光」、この二段構えの知によって、人間界の

25) Cf., I-39. このパラグラフではすでに、『パンセ』を特徴づける人間の中間的性格へと、踏み込んで表現しているようにも見えるのだが……。

26) 邦訳では「名称の定義」と訳されている。それに対比される定義は「事物の定義」ないしは「ものの定義」と訳されるものである。概ね「事物の定義」と訳されているようである。例えば cf., *Ibid.*, I-18.

27) 例えば, *Ibid.*, I-11. この節では、あわせて「人間」を定義することの滑稽さを、プラトンのそれを例に挙げ、笑しげに揶揄している。人間とは「羽のない二本足の動物」、ということが真実であれば、鶏の羽をむしれば、人間になるのだろうか、というわけである。

28) *Ibid.*, I-18.

事象は明晰に認識できる、というわけである。これを可能にする人間にとって最も完全な秩序が幾何学の体系、幾何学の秩序である、とパスカルはその根拠とともに力説するのである。

#### 2.2.4. 第一部・第三段 (23-40)

こうして、幾何学的論証とは何か、という問いに定義と命題のあり方を軸にして答えた後、そこで明らかになった定義不能の、あるいは定義不要の術語をさらに分析的に検討し、そこに共通に認められる二つの無限について述べるのが、この前半の最後の課題となる。時間、運動、空間、数、いずれも、大きい方に向けても限りなく、小さい方に向けても限りないことを指摘する。極大値、極小値に到達できない、という共通の性格、現状はいずれもその中間にある、ということ、換言すれば、無限大と無限小との中間でしか存在できないことを指摘する。その不可思議の理解こそ、つまりは、無限と虚無という二重の無限に取り巻かれていることを知るからこそ、自分自身を知ることである<sup>29)</sup>、と語ることによって第一部を終えている。

二重の無限のパースペクティブとそれに取り囲まれた人間という構図には、このテキストでも到達している。それを二重の無限性の分析から力点を移し、人間の引き裂かれた自己認識に定位して徹底的に展開するのが、『パンセ』の断章、特に断章72 (ブランシュヴィック版<sup>30)</sup>)、「人間の不釣り合い」という表題をもつ断章、ということになるのか。

### 3. 第二部「説得術について」のテキスト分析

第二部の展開については、紙数の関係もあり、簡略に行きたい。第一部と異なる特徴、問題点についてのみ、指摘しておくことにする。というのも、第二部として残されているテキストの内容は、必ずしも先述した論文構想に基づく第二段階の展開とはなっておらず、敢えて言えば、第一部の書き換え的要素が主体の文章となっているからである。その整理のされ方やさらなる数学的明確化等については、ここでは論じない。本稿の主題とした説得術に関する限りで、その内容について簡潔に言及しておきたい。

さて、この第二部は、「説得術について」と題されており、幾何学的精神と説得術との関係こそが、論及すべき中核的内容をなしている。その説得術であるが、まずはそれが何であるか、何によって構成されているかについて説明される第一段階 (1-9)、しかしながら、その説得術の包含する「気に入られる術」について述べるには、パスカル自身は不適當である、と語りだす第二段階 (10-18)、という順で論及される。したがってこの第二段

29) *Ibid.*, I-39-40. 人間の中間的性格の描写に関して、『パンセ』と比較するメナール氏の評価は、幾分厳しすぎるのかもしれない。『パンセ』の断章で展開されることになる「パースペクティブ」は、ここでは「素描」されたのみ、「マージナル」にとどまる、とある (この評価は、テキストの執筆時期を巡って論及された箇所での指摘)。もちろん、以下の本文でも述べるように、「力点の相違」は明らかである。Cf., *Ibid.*, p. 373-74.

30) ラフュマ (Lafuma) 版では199。この他にも、第1写本に基づくセリエ (Sellier) 版、パスカルの思想的流れを重視した、哲学的観点からは評価の高いカプラン (Kaplan) 版など、いまやそれぞれに特色ある校訂・編集の『パンセ』が出版されている。



階は、説得術のもう一方の構成要素たる幾何学的論証が担うべき役割について、おもに展開されることになる。かくして、「説得術とは何か」と、説得術の中で幾何学の占める役割とを語った後、質疑応答部分とでも言うべき第三段階（19-30）が来ている。この中で、幾何学の有効性が、デカルトのコギトの例をも参照しつつ展開されることになる、というのが、第二部のテキストの基本的構造である。以上の三段構成に対応するパラグラフ番号の区分については、異論があるかとは思いますが、あくまで筆者の試行的区分である、とご理解・ご容赦いただきたい。

### 3.1. 第二部・第一段（1-9）「説得術とは何か」

さて、その第一段階において、パスカルはいよいよ、というか満を持して、「説得する」とは何か、つまりは「説得術」とは何か、を語りだす。それはまず、「同意を与える時の仕方」と当の「問題になっている事柄そのもの〔の条件〕」に関っている、と語り始める<sup>31)</sup>。あることを説得される、ないしは説得するときの要件として、まずは同意する側のあり方、さらには同意する内容・事柄そのもの、という二つの要件が指摘される。主観のあり方と対象・事物の性質、と言えいいのだろうか。続くパラグラフで、その同意する仕方として、悟性 (*entendement*) によるもの、意志 (*volonté*) によるもの、という二つの認識能力ないし感受能力をパスカルは指摘する<sup>32)</sup>。理性的に受け入れるのか、感情的、意志的に受け入れるのかの違いが指摘されている、ということであろう。前者の方が「より自然」で、後者の方は「自然ではない」にしろ、「心地よさ<sup>33)</sup>」によって受け入れられるが故に「より普通」に認められる仕方であると、パスカルは見なす。

もちろん、このテキストで問題にされる説得術は、自然的領域に関する限りでのことであって、神の領域、超自然的な領域に介入するものではないと断った後<sup>34)</sup>、いよいよ、その内在的定義というか、その内的本質について語りだす。

人間に接近可能な真理がわれわれの内に入る、ということは、「精神 (*esprit*)」によってか、「心情」によってか、換言すれば、推理 (*raisonnement*)<sup>35)</sup>を通してか、「意志の軽はずみな気紛れ (*caprices*)<sup>36)</sup>」によってか、とさらにパスカルは展開する。この二つの受け入れ口の指摘に続いて、これはすでに第一部で展開されたことではあるが、それぞれの受け入れ口に対応した、それぞれの原理・出発点があると論及され、精神による真理の受け入れに関しては、その真理の公理的部分（ないし「根源的な言葉」の部分に対応するもの）が、後者、意志の原理としては、「ある種の欲望 (*désirs*)」が、「共通に認められる自然な欲望」が指摘されることになる<sup>37)</sup>。

これに対して、当の問題、あるいは、そこで問題にされている事柄の性質、その「多様

31) *Ibid.*, II-1.

32) 意志で受け入れられることを感受能力というのも幾分奇妙なまとめ方だが、デカルトの表現で言えば能動性に関する能力も、ここでは感受的能力一般に関するものとして使用されている。後に、心情 (*cœur*) というタームでも語られている。

33) *OCIII*, II-2. 「証明 (*preuve*)」ではなく心地よさ (*agrément*) によって」と形容している。

34) *Ibid.*, II-3-4.

35) 理性の働きのこと、白水社の訳では「理性」が当てられている。

36) *OCIII*, II-5.

37) *Ibid.*, II-6. 「ある種の欲望」、例えば「幸福になりたいという欲望」、そのための「個々の目標」などとさらに展開されている。それが原理であり、原動力をなすもの、というわけである。

性」が、さらに指摘されねばならない。それらは、必然的に承認できるような事柄もあれば、受け入れ側に快適な事柄もある。あるいは最初から反発を引き起こすような事柄もある、というわけである。これはつまり、受け入れ側、主観の側の問題や条件に加えて、対象の側、客観の側の条件ないし状況を考慮しなければならない、ということである。それについて納得する、同意する、ということが成立するためには、この二つの側面、主観と客観の側の受け入れ可能性を検証しなければならない、との指摘である。納得し易いか否かとは、単に問題となる内容だけでなく、主観の側のあり方によっても異なってくる、というのは、けだし当然である。この主観内の葛藤・軋轢のことを、パスカルはその独自の語彙を使って「認識と感覚」あるいは「知ることと感ずること」の対立、と表現する<sup>38)</sup>。「結末を想像するには、人間自身がほとんどまったくわかっていない人間の最深奥部で起こることのすべてに通じていなければならないであろう<sup>39)</sup>」と語る所以である。対象のあり方をストレートに反映する「真理」につくか、それをデフォルメする「欲望」につくか、の「ためらい (balancement)」ないし「戦い (combat)」が、問題なのである。

こうした心理分析、対象分析を経過した後、パスカルは、本テキストの核心部分たる説得術とは何か、説得する (persuader) とはどういうことかを、端的に語り始める。

まず、説得しようと思うのであれば、その相手について知らなければならない。つまり、相手の受け入れ態勢、すなわち、その精神と心情、あるいは理性と感情、その両方をわかっている必要がある。「その精神の認めている原理が何か、その心情の愛しているものが何かを知る必要がある<sup>40)</sup>」というわけである。相手の知性的側面とともに、感情的・意志的側面についても十分に理解する必要があることを語っている。当の問題・事柄が、相手の精神に直接関わっているのか、むしろ、その感情や意志の方に関わりが深いのか、了解しておく必要がある。こうして、主観の側の二重性に対象の側の多様性、ともに考慮に入れるのが、両側面を熟知することが、何より大切なモメントとなる。そしてこのパラグラフ9の最後で、パスカルは説得術をこう定義している（「定義」という言葉が、ここでは違和感があるというのであれば、こう「表現」している、と言ってもよい）。

したがって、説得術は、納得させる (convaincre) 術と同程度に気に入られる (agréer) 術からも成り立っているのである。〔それほどまでに、人間は理性 (raison) よりは気紛れに支配されているのである〕<sup>41)</sup>。

もちろん、〔(カギ括弧)〕で括った部分は、定義的表現ではない。要は、説得術には、二つの構成要素があるということ、ひとつは納得させる術、もうひとつは気に入られる術、以上二つの技術が整ってはじめて説得術は、説得という要件は成立する、ということである。説得には“persuader”という、納得“convaincre”とは異なるタームが使用され

38) *Ibid.*, II-8. この対比はパスカルの思索の核心部分を語るものであるが、このパラグラフでは「connaissance」と「sentiment」という名詞で表現されている。パスカルの思想としては、動詞的に表現されることも、当然頻繁にある。

39) *Ibid.*

40) *Ibid.*, II-9.

41) *Ibid.*

ていることにも、留意しておくべきであろう<sup>42)</sup>。これは、説得を、納得よりは広い意味合いでパスカルが使用している、ということ、言い換えれば、説得には、納得させる技術だけでは不十分な場合がある、ということが、この定義的表現からも端的に見て取れる、ということである。「納得」から「説得」までの隔たりの了解、それこそが、パスカルの「説得術」理解の核心である。

### 3.2. 第二部・第二段(10-18)「幾何学的精神とは何か」

それでは、こうした二重的規定、両義的規定を本質とする説得術と幾何学的精神との関係、特に幾何学的論証との関係を検証したい。そこで目指すのは、幾何学的精神の内包について、つまりは、幾何学的精神は、説得術と同義なのか、納得させる術と同義なのか、という疑問の解明であることを、もう一度繰り返しておこう。それはまた、『パンセ』の断章から想定される繊細の精神との対立関係を認めうるかどうか、という問題でもある。

さて、説得術の内包が正確に規定された後、それぞれの構成要素についての分析に向かうかと思いきや、パスカルは、いきなり、というか唐突にも、その片方しかここでは展開しない、展開できない、と告知する。ここで述べるのは「納得させる方法」のみであり、「気に入られる方法」については述べない、と明言する<sup>43)</sup>。こちらの方法は、前者より「比べようもなくずっと難しく、捉えにくく、有用で、驚くべきものである」と述べた後、それを論じる能力が自分にはない、と自身の力不足を正直に認めることになる。そうした領域についてもそれなりの規則があることを否定するというのではなく、自身の能力や気質からして不可能である、と自認しているのである。こうした自制的な自己評価の故に、パスカルについては、幾何学への能力のみを認め、つまり、論証のための能力、すなわち「納得させる術」については、その有能さを承認するにしろ、もうひとつの側面、相手の心のあり方に応じた柔軟な技術、つまり「気に入られる術」について適性がない、と判断するのが通例になっているように思われる。このパラグラフでも、パスカル自身、この分野での自身の不適合・不釣り合い (*disproportionné*) さえ語っている<sup>44)</sup>。さらには、この領域について語りうるのは、この技術をもっているのは、私の知り合いにはいるが自分ではない<sup>45)</sup>、と明言するほどである。こうしたパスカルの「謙遜」については、慎重に考量する必要がある。パスカルが自ら語る無力を、素朴に信ずるのも事実には適合しないように思われるし、単なる謙譲の表現と見るのも、パスカル自身の自己理解に対応しないように思われる。説得術における一方の技術を、内在的に展開することがなかったのが、いかなる理由であったにしろ、その語ることのなかった技術についても、やはりその基本的な特性については明確にしておくべきであろう。そして、それが幾何学的精神といかなる関係において、パスカルの頭の中に、最終的に成立していたかを見ておきたいと思う。

「気紛れ」に従う領域であるにしろ、把握のための原理がないわけではない、ただそれが多様で、個々人でまちまち、さらにはその個人の中でも状況に応じてさまざまに変化する

42) 白水社の訳文では、残念ながら、ときに混同されて訳されている場合がある。Cf., *Ibid.*, II-7.

43) *Ibid.*, II-10.

44) こうした表現はもちろん、「人間の不釣り合い」を語る『パンセ』の断章のタイトルとして使用されることになるタームでもある。Cf., L. 199/B. 72.

45) *OCIII*, II-11.

るので、幾何学的に捉えきれない、というのが、その把握困難の理由であろう。幾何学が通用しないというのではないが、それが、可能な場合はきわめて少ない、とも語っている<sup>46)</sup>。最後には「私には、推論とわれわれの気紛れの定めなさを調和させる確固たる規則を示す手段があるのかどうかかわからない<sup>47)</sup>」とまで告白している。

おそらく少し極端な解釈かもしれないが、このパラグラフでの表現からすると、パスカルにとって、幾何学的推論のシステムは、基本的に「気に入られる術」にも及ぶ、と理解すべきであろう。原理から始めて真理にいたる、という幾何学的論証の順序は、ここでも踏襲されているからである。その原理が安定しない、なかなか見つからない、という問題があるにしろ、そうした「原理から真理へ」という手続きの方向性は、はっきりと肯定されている。「真理と、真実あるいは楽しみに関する原理との関係をわからせる術がある<sup>48)</sup>」と。

第13パラグラフ以降、パスカルは、説得術における「納得させる術」つまりは「幾何学的論証」に関する技術についてのみ、説明してゆくことになる。定義と公理ないし原理、最後に定義的レベルでの混乱の避け方、という三点について、その基本線を描写する。ここはまったく第一部で述べた部分、つまり「納得させる技術」の部分の、定義、公理、そしてその問題点についての再確認の内容となっている。あるいは、その簡略化、明晰化の帰結を見て取れる、と言えは的確だろうか。こうした条件に基づく限り、論証は、納得させる方法は完璧である、ということである。

以下、技術的指摘が続くが、もはやこれについては論及しない。8つの規則から5つの規則へと収束し、その更なる簡略化、実用化に至っているのが、明確に見て取れる。最後にこう要約して、パスカルは、第二部の第二段階を終えることになる。説得術は「次の二つの規則に要約される。課された〔必要な〕すべての名称を定義すること。心の中で、定義されたものでなく定義そのものを思い浮かべることによって、すべてを証明すること<sup>49)</sup>」と。

### 3.3. 第二部・第三段(19-30) 新しい方法とは何か、デカルトのコギトの革新性

以下、予想される反論へのパスカルの回答として記された部分について、最後に述べておこう。デカルト哲学への熱い擁護の言葉が飛び出すのもこの段階である。

さて、反論としては三つのことが予想される、として、1. この方法は何ら新しくない、2. 大変容易で、学ぶに値しない、3. あまり役に立たない、の三点を挙げている<sup>50)</sup>。これに対するパスカルの反論も、すべて全否定的なもので、それ自体は特に驚くべきものではない。ただ、その新しさを弁明する流れの中で、デカルトのコギトの革新性について、その批判者に対し、アウグスティヌスからの剽窃ないし影響を主張する論者に対し、デカルトの新しさ、デカルト哲学の革新性を徹底して擁護しているのが、個人的(筆者)には、特に印象的である<sup>51)</sup>。システムとしての活用を抜きにして、単に表現上の一致なり類似なりを語るべきではない、というのが、パスカルの基本姿勢である。一言引用しておこう。

46) *Ibid.*, II-12.

47) *Ibid.*

48) *Ibid.*

49) *Ibid.*, II-18.

50) *Ibid.*, II-19.

51) *Ibid.*, II-23.

ある言葉を、より長く広汎な反省も加えずに漫然と書くことと、デカルトが意図したように、物質と精神の区別を立証する一連の驚くべき帰結をこの言葉の中に認め、この言葉を全自然学の確固・不動の原理とするということとの間に、どれほど大きな相違があるかを私は知っている（からである）<sup>52)</sup>。

こうした弁護の言葉は、自身に対するものも、デカルトに対するものも、パスカル自身の真情からでたものであることは疑いない。それはまた、パスカル自身が提示しているように、モンテーニュの考えに支えられたものでもある<sup>53)</sup>。対話の仕方を説いた章において、モンテーニュは、種子と土壌との関係を比喩として使い、思想の生きた伝承の仕方と、死んだ受容の仕方との違いを、繰り返し論じている。「私は毎日、愚かな者が、愚かでない言葉を吐くのを聞く<sup>54)</sup>」と、モンテーニュはパスカル以上に容赦ない。パスカルの回答の基本線も、この発想に基づいており、幾何学的精神の新しさ、有用性を、論理学を批判しつつ擁護する際に、あるいはデカルト哲学の新しさ、徹底性を擁護する際に、ふんだんに活用・展開している。モンテーニュをアレンジしつつ、パスカルは、「同じ思想が、その唱道者とはまったく違ったふうに、他人において成長することが時としてある。その生まれた畑では実を結ばなかったのが、移植されて豊かに実を結ぶというわけだ<sup>55)</sup>」とも語っている。

限定された本テキストの課題を十分に果たすのは、幾何学ないし幾何学的精神であって、論理学ではない、というのがここでのパスカルの基本姿勢である。幾何学的論証の新しさ、その容易さ（あるいは困難さ）、そしてその有用性について、パスカルは逐一ではないにしろ、全体的に擁護している<sup>56)</sup>。知られているにしろ、どう知られているか、容易そうに見えるにしろ、どう容易であるか、どこが困難なのか、その有用性はどこにあるのか等々、それぞれに熟慮を要する項目である。判断力、パスカルの表現を借りれば「識別する精神（*esprit de discernement*）<sup>57)</sup>」が問われているのである。「私はよいものを、平俗で、どこにでもあって、親しみ深いものと形容したい。……私は大げさな言葉がきらいだ<sup>58)</sup>」という最後の言葉も、きわめてモンテーニュ的である。

#### 4. 説得術と幾何学的精神——メナール氏の解説をめぐる

これまで、テキストに沿ってパスカルの思索の向かうところを見てきたが、最後に、当初の問題点との関係で、果たして、説得術とは何だったのか、幾何学的精神とは何だったのかをまとめておこう。それはまた、繊細の精神との関係、『パンセ』でのパスカルの思

52) *Ibid.* 訳文は、前述した白水社の翻訳（支倉崇晴訳）を使用させていただいている。必要に応じて表現や訳語に修正を施している。他の箇所の引用、要約部分についても同様である。

53) モンテーニュ『エッセー』（III-8）。

54) *OCIII*, II-22, n. 1. これは、メナール氏のコメントの中で引用されている。

55) *Ibid.*, II-24, n. 1. こちらは『エッセー』III-5を活用、とメナール氏。

56) 第1の反論にのみ答えている、というのは少し言い過ぎかもしれない（cf. *Ibid.*, II-19, n. 3）。内容的には、三項目のいずれにも及んでいるからである。明示的に示されていない、だけである。

57) *Ibid.*, II-21.

58) *Ibid.*, II-30.



想の進展なり変化なりについて、検討することにもなるかと思う。

さて、最初の問題、説得術とは何か、についてはすでに十分に明らかであるかと思う。単に論証的精神、狭義の幾何学的精神、数学的精神との対立関係・対比関係にある「気に入られる術」として主張されていたわけではない。少なくとも「幾何学的精神について」というテキストに関しては、そのことは明快である。先にも引用したように、第二部・第9パラグラフで明言する通り、説得術とは「納得させる術」と「気に入られる術」、二つとも併せもった術・方法である、ということである。これは、第二部全体で展開される論旨の基本構造であり、動かない。後者の術について、記述することがあまりに少ない、というだけである。つまり、論理的・数学的な精神に加えて、相手の思考や感情・振る舞いなど、総合的に他者を理解できるような柔軟な精神、つまり「気に入られる術」も含めて、説得術というわけである。

そう理解すれば、これは単にレトリックとロジックとして対比される、一方（レトリック）のみで解釈するわけにはいかない。それはまた、ロジックのみ、数学的精神のみ、というわけにもいかない。少なくとも数学なり幾何学なりを狭い意味で捉えている限り、それは疑いない。まずこのことを確認しておこう。日本語でも、フランス語のテキストでも紛らわしい「納得させること」と「説得すること」とは、パスカルのこのテキストにあっては明確に区別されている。前者は、狭い意味での幾何学的精神の発動であり、定義、公理などを介し、厳密に演繹的な順序に即して論証していくこと、であり、後者は、それに加えて、対話する相手の知性や感情に配慮しつつ、言葉を選び、展開を考えること、である。つまり、「説得すること」ないし「説得術」は、「納得させること」ないし「納得させる術」より上位の概念、それを包み込む類概念である（蛇足ながら敷衍しておく、と、「納得させる術」がそのなかの種概念ということである）、と言っておこう。

ここまでは明快であり、問題はないと思う。「はじめに」で述べた筆者の戸惑いは、単に個人的な戸惑い、特に『パンセ』の表現や定型的解釈に引っ張られた個人的な混乱でしかない。問題は、次の展開にある。それは、この説得術、あるいは説得の精神は、幾何学的精神とどう関係するのか、という問題である。これは『パンセ』の断章を考えに入れることで、一目瞭然のようにも思えるが、果たしてそうであろうか。

というのも、その断章1<sup>59)</sup>では文字通り「幾何学的精神と繊細の精神との違い」と銘打たれており、両者が相互対立的に提示されているのは明らかだからである。しかしながら、その断章では、さらに「正確の精神<sup>60)</sup>」や「歪んだ精神」にも言及されており、両者の共通性がまた指摘されていることも事実である。さらには、その「原理の少なさ」で

59) 便宜上、ここでは、ブランシュヴィック版の断章番号を使用する。問題の断章群が一箇所に集められており（断章1から4まで）、議論の展開、混乱が目に入り易いからである。その他の版の断章番号についても適宜示すつもりだが、本稿は版の異同自体を問題にするものではないので、少なくともここでは、その異同についてはこだわらない。もっともラフュマ版でも、そのうち三つは一箇所にある（断章511から513まで）。

60) 厳密に表現すれば、「正確な精神（esprit juste/droite）」であり、断章2では「正確の精神（esprit de justesse）」というタームで出てくるのだが、この形容詞と名詞との違いについてもここでは考慮しない。現在の論点からは無視できるものであろう、と思うからである。「幾何学的精神（esprit géométrique）」、「幾何学の精神（esprit de géométrie）」の関係についても同様である。

「幾何学的精神」が、「原理の多さ」で「繊細の精神」が特徴づけられていた断章1とは異なり、断章2では、幾何学的精神は、多数の原理を「混同することなく理解すること」と語られ、それに対比して、「少ない原理から結果へ」と向かう「正確の精神」が対比されている。

断章1において、「原理の少なさ」で特徴づけられた幾何学的精神が、次の断章では「原理の多さ」で説明されている。「鋭く、深く徹する」精神、精神の「力と正しさ」を特徴とする精神（正確の精神）に対し、幾何学的精神は「精神の広さ」を特徴とする、と対比的に説明されている。多数の原理を混同することなく柔軟に理解し、真理に達するような精神を、「正確の精神」と対比して〈幾何学的精神〉、と第2の断章は語っている。それはつまり、幾何学的精神にしる、単に論理的の精神にとどまらず、柔軟に多数の原理を考える、敢えて言えば、繊細な精神、〈柔軟で繊細な判断力に富んだ精神〉でもある、ということが、ここでは語られているのである。

区別における、こうした表現上の逆転を、もちろん、訳注等にもあるように<sup>61)</sup>、一方（断章2）を、物理学的精神と幾何学的精神との違い、あるいは、数学的・理系的精神のなかでの区別、と理解し、他方、断章1の区別の方は、文系和精神と理系和精神との区別、と理解して、比較の対象が異なることで、表現上対立的になっただけだ、と整合的に解釈することは、なるほど可能である。

だが、これは、幾何学的精神をどのレベルで考えるか、という問題につきるように思われる。それはなるほど狭義の幾何学的精神であれば、一方で繊細の精神に対立する「原理から論理的に演繹してゆく精神」となり、他方、物理学的精神との対比では、多数の原理を柔軟に、敢えて言えば繊細に考慮しつつ真理に向かう、総合的な「広い精神」ないし「柔軟な精神」ということになる。しかしながら、幾何学の旧来の用法がそうであったように、それらの対立をともに含み込む「類的な意味合い」での幾何学的精神もまた、存在するのである<sup>62)</sup>。その広い意味での幾何学的精神であれば、繊細の精神、物理学的精神つまり「正確の精神」、ともにみずからの内に内蔵している。そうであれば、先の説得術、つまり説得の精神がそうであるように、幾何学的精神もまた、いわば説得の精神として、論証の精神、狭い意味での幾何学的精神とともに、柔軟にして他者の感情をも配慮できる「気に入られる術」、「繊細の精神」までも内蔵することは十分に可能である<sup>63)</sup>、と言える。

## 終わりに

やっと結論に近づいたように思う。「幾何学的精神について」のテキスト上の検討に加

61) もちろんブランシュヴィック自身も、彼の版のなかで、物理的精神といわゆる幾何学的精神との違いをここに見ようとしている。しかし、前者もまた、広い意味での幾何学的精神のひとつとして、語られてもいる。表現上の対比は、総合的精神としての幾何学的精神と当時の物理学的精神との対比、と理解するわけである。断章2に関する、ブランシュヴィック自身による注釈、及び中公訳の前田氏の注を参照のこと。

62) OCIII, I-21, n. 1.

63) これは、筆者だけの偏向した解釈ではない。メナール氏もこう語っている。「正確の精神が、幾何学の精神のより単純な形式と見なせるとすると、繊細の精神は、幾何学の精神のより複雑な形式ということになる」(Cf., p. 385; p. 443)。いずれも、幾何学的構造をその基盤としてもつ、というわけである。

えて、『パンセ』の断章との比較、さらにそれぞれの校訂者のコメント、あるいは訳者の注釈などを見てきて、最後の結論というか感慨を述べておこう。

まず、説得術、説得の精神の最終的定義については問題ないかと思う。それは納得させること、気に入られること、いずれの精神をも含む技術、論証的にしてレトリックの才に長けた精神のことである。それを幾何学的精神として展開するパスカルの意図に照らせば、単に、その一方にのみ関する解釈は、やはり当たらないのではないか、それは狭義の幾何学的精神であり、このテキストでの真意は、むしろその上位の概念、つまり論証もレトリックも含み込んだ方法、表現力に富み、論理的展開にも配慮した技術、それが本来の幾何学的精神、そしてまた説得術である、というのが、筆者なりのテキスト解釈、幾何学的精神の解釈の基本線であり、到達点である。

説得術についてはパスカル自身説くところであり、異論のあるところではないが、幾何学的精神の「拡大」解釈については、異論も十分に予想される。さらに、パスカルのテキストそのものに沿った表現によってこの解釈を支える箇所を、探すべきであろう。がしかし、少なくとも、幾何学的精神が、単に論理的・非現実的精神だけではないことは明らかである、と筆者には思われる。その柔軟な適用、現実的な活用もまた、幾何学そのものの場に定位しても十分に想像可能である。というより、柔軟に、その拡がりにおいて受け止める方が、パスカルの意図、ならびにパスカル自身が最終的に辿り着いた境地から考えると、むしろ自然であるように思われる。パスカル自身、なるほど繊細の精神に長けた友人メレ、というか、オネットムの精神に長けた友人メレに対して、幾分かコンプレックスはあったのかもしれないが、しかし、そのレトリックも、その人間理解も、はるかにメレを、あるいはメレ的精神を凌駕していたのもまた、歴史的事実である<sup>64)</sup>。パスカルが、論理的精神にのみ凝り固まった、単なる無骨な精神の持ち主だったとは、『パンセ』、『プロヴァンシアル』、そしてこの「幾何学的精神について」と読み進むとき、とても首肯できるものではない。メレのパスカル評価の一面性はともかく、パスカル自身には、二つの精神はともに備わっていた、と言っても何ら問題ないであろう。それを裏付ける著作なり小品なりを、「幾何学的精神について」以外でも、多数生み出している、と言えるからである。さもなくば、歴史に残るパスカルの著作や遺稿は存在しないであろう。自己評価の厳しさ、メレによるパスカル評価の一面性を、文字通りに受け取る理由はない。テキストの主旨如何で、当然、その中での優越する側面が目につくのは事実であろうが、それは他の側面が存在しない、ということではない。

さて、そうなれば、ロジックとレトリック、あるいは幾何学精神と繊細の精神、これらの対比的表現、対立的表現は、パスカルの思想全体を端的に特色づけるものではない、と言えるのではないか。さらに上の段階の精神として、あるいはレトリックを縦横に駆使するロジック的精神として、繊細の精神に長けた幾何学的精神として、パスカルの精神を特徴づけてもいいのではないだろうか。それはもちろん、名目的定義ないし自由な定義としての表現ではなく、探究の果てにくる「事物の定義」に関わる表現、として言うのであるが、もはや十分に語れただろうか。

64) メレの手紙の内容、及びそのねつ造については、メナール氏の解説 (pp. 348-51) 及び II-11 の注を参照のこと。

最後の最後に、冒頭の当惑に戻れば、今回の原発事故に絡みよく TV で見かけた、N 氏の説明の納まりの悪さもまた、これで納得がいくかと思われる。論理性のみの説明が話を説得的にするわけではないように、レトリックのみの説明もまた説得力を欠くことがある、ということであろうか。定型的なレトリックでは説得には不十分である、ということであろうか。最後の最後に、こう言っておこう、論理性、レトリック、併せてこそ説得術・説得の精神であり、敢えて言えば、柔軟にして総合的な幾何学的精神からの説明こそ、説得術本来の発現である、と。